

苦節 10 年小倉外事専門学校設立に情熱を傾けた 初代校長の大島直治氏

—大学正門に鎮座されている像はだれ？—

山 崎 勇 治
(国際教育交流センター)

キーワード

大島直治学長、大島直治学長像、小倉外事専門学校、小林安司先生、今中次磨学長、

当時学生：加藤宗幸さん、守谷隆三郎さん、三宅英利さん

要旨

北九州市立大学正門に鎮座する本学の創設者である大島直治学長像を知る学生を探すことは困難である。講義をしてみてわかった。そこで大島直治校長の像がなぜ設置されたのかを、当時の教員、学生の生の声を通じて明らかにしようとした。

敗戦による自信喪失、朝鮮戦争による進駐軍の駐留。若者に哲学と平和の大切さを説いた大島校長の苦節 10 年を見る。

はじめに — 大学正門に座する大島直治学長寿像を知っていますか —

この人は誰かわかりますか？

筆者は 3 年前からオムニバス式の講義「世界の学び方」を 1 学期と 2 学期に担当している。この講義では本校の正門に座している本校の前身である小倉外事専門学校の創設者である「大島直治学長」胸像を知っていますか？から始めることにしている。

彼らの答えは大島先生の寿像を見たことがない、あるいは見たことがあるが誰かについて知ろうとしたことはない、がほとんどであった。

苦節 10 年小倉外事専門学校設立に情熱を傾けた初代校長の大島直治氏

その後、筆者はパワーポイント方式を導入して本学の国際交流史を中心により具体的に可視的に講義をした後、宿題として授業の感想を書かせるように変更した。

この講義には外国語学部、経済学部、文学部、法学部、地域創生学群など全学部生 110 × 2 回 = 220 名の受講生が受講していることも影響しているのか「北九大史に興味を持つようになった、とくに大島校長に興味を持った、もっと詳しく知りたい」という回答が多くなった。



「北九大北方キャンパス正門に鎮座の大島学長像」(筆者撮影。2022 年 1 月)

学生のレポートをいくつか紹介したい。

A 君

今は国際交流が豊かな大学ですが、昔は戦争などの影響で大変苦勞していたのだと思います。特に大島直治氏が大学の認可を得るために朝早くに家を出、投宿先の宿に米を持参していたり、骨の折れるような日々を送っており、その努力が今の北九州市立大学につながっていると考えると素晴らしい行動力だと感じました。

今回の講義でもあったように自分から行動していかないと進展しないと思うので、私も海外に留学して、大学や北九州市の魅力を発信していくことがカギになるのではないかと思います。海外に留学しなくとも、周りに留学生など、外国人はたくさんいるので、知り合いや友達になり、各々の国の文化の魅力を交換していくこともできると思います。

B 君

北九州市立大学の前身が小倉外事専門学校であり、現在も盛んに国際交流を行っていることは知っていたが、学校設立の背景に戦争の歴史が大きく関わっていることをこの講義を通して初めて知ることができた。

C 君

私は、今回の授業で北九州市立大学の国際交流の歴史を学んでとても印象深かったことは、濱田良祐小倉市長の平和宣言、そして大島学長の小倉外専門学校の設立だった。

D 君

小倉外事専門学校の創設から、現在の北九大ができるまでの経緯を初めて知り、濱田市長や大島学長の熱意が非常に印象的だった。大学の創設そのものだけでなく一中略—自分がこのような歴史ある大学でこれから学んでゆくことができることを誇らしく思った。

E 君

一度マッカーサーの一言で廃止されそうになった学校をなんとか持ち直したことです。それまでの苦勞や、設立後のお金の問題もなんとか工夫しながら今の姿になっていったことに感動しました。朝早くから働いていただいた大島直治初代学長にも感謝したいです。

F 君

今の国際交流豊かな北九大があるのは、大島直治校長をはじめ、色々な人達の多大な努力により実現していると強く感じ、言葉は悪いですが、昔の北九大があんなにも貧相だったことが衝撃的であった。

G 君

キャンパスが狭い理由に、当時の男子大学生が瓦礫撤去をしなければいけないという理由

があったことに驚いた。また、大学として存続させるために多くの人々が多大な努力をしてきたということにすごく感心した。

H君

北九州市立大学が、マッカーサーの命令によって大学となったことが一番驚きました。大島学長のご尽力のおかげで現在の北九大があると思うとすごいなと感じます。また、北九州市がもともとは原爆を落とされる予定の地であったということは初めて知りました。戦争の惨禍を二度と繰り返さないという意志をもとに設立された大学であるからこそ、これから更に学生の英語や第二外国語の習得によって、諸外国との関係をさらに友好的にしていけるためのきっかけづくりの出来る大学になっていけばいいと思いました。

この講義をより豊かにするために、学生が興味を持つように「苦節10年、小倉外事専門学校設立に情熱を傾けた初代校長の大島校長—大学正門に鎮座されている胸像はだれ?—」と題して当時の教員や学生たちが小倉外事専門学校開学に向けた大島校長の情熱をどのような受け取ったのか、彼らの言動を中心に資料を整理し、それを提供したい。

1. 「小倉十年」小林安司先生

小林安司先生は東京帝国大学卒業後、帰郷し、小倉外事専門学校に奉職された。同先生は旧小倉市のご出身ということもあって、市や周辺地域のことについて詳しく知っておられ、東奔西走される大島先生のよき助言者となり、またその高い知性によって共に荆棘の道を切り開かれた大学「創設の親たち」のお一人である。

また、筆者が学生の頃、小林安司先生の「漢文」の授業を2年間も受けたことがある。『杜甫詩選』（岩波文庫）を教科書として杜甫の旅と望郷の念を謳いあげた漢詩を1つずつ丁寧に解説してくれるのである。あまりの面白さのために単位取得に関係なく結局2年間受講した。（小林安司先生は「大島先生の小倉十年」と題して大島先生を語っておられる）

大島直治先生が九州帝大を停年退職されて6年の後—それは終戦の翌年のことになるが、昭和21年に小倉外専校長として小倉に赴任せられて、昭和31年に北九州大学学長として勇退されるまでの満10カ年の間が先生の〈小倉時代〉ということになる。

この期間は、あたかも戦後の荒廃から祖国復興への苦難の期間であるが、ご老体の先生にとっても、教育行政家としての日々は容易ならぬお骨折の連続であったとお察し申し上げる次第である。

昭和21年9月、志願者八八九名から選抜された米英科、中国科計二八二名の希望に燃える新入生をむかえ、仮校舎の天神島国民学校の講堂で挙行された入学式で、学長は以下の通りの

訓示を述べられた。

すなわち「わが国こそは常に新しく、したがって永遠に若き国であるといえるであろう。これを文化的に視るならば、不断に東西の文化を創造し、かくして世界の文化に貢献しつつ、きわまりなく民族的個性を展開させていくことに寄与するところ、本学の歴史的使命がある」と。当時、校舎は陸軍工兵隊の荒れはてた建物で、占領軍が構内に隣接して駐留していたような状況であった。それに入学式の翌六月には朝鮮戦争が勃発し、北方、城野は基地の姿に一変した。このような異常な環境の下に大島学長の説く祖国復興、平和希求の建学の精神に基づき学生諸君が愈々志をかたくもち、我々として切磋琢磨した当時の姿は忘れられない。

翌二十二年、市の郊外の北方にある荒れ果てた旧軍用建造物が譲られて、現在地に移転したが、校舎とは名ばかりで雑草に蔽われた貧しい学園にとって、まず学校施設の整備・教官の充実が焦眉の急であったが、当時早くも学制改革の波が押しよせてきていて、“大学昇格”が校長である大島先生の双肩に重くのしかかってきていた。

当時教頭格で先生をお助けしていた末岡教授（故人）の手記によると、「この間に大島校長が校務の多忙な中に大学制へのすべての仕事を統率し、さらに自ら東奔西走、席温まる暇なく、あるいは製鉄所に、あるいは安川電機、黒崎窯業に、あるいは西鉄に足を運んで、効果を挙げられ、地区別父兄会にも出席して、大学制への理解を指導された勇姿は今尚眼前に彷彿たるものがあり、私どもはそれにより鞭撻され、活を入れられたことを追想する」とあって、よくぞこの間の情況が記述されている。

当初先生のご自宅は福岡の西部鳥飼であったので、雨の日も風の日も朝は三時、四時という早朝に起床せられ、いつも五時の一番列車に乗られての小倉へのご通勤であったが、もともと頑健な先生とは申せ、何分にもこ老年のこととて、そのご苦勞の程は想像以上で一これが昭和二十六年の夏ごろまでもつづいたのだが、それにつけても老夫人の毎日のご苦勞も大変なものであったと拝察申しあげていた。

その頃先生は、当時の市長浜田良祐氏と相提携して、教職員学生一体の力を結集して、小倉市以外の他の隣接四市に働きかけ、五市共立大学運動をおし進められ、幾多の困難をのりこえて、ついに昭和二十五年春、小倉市単独による市立北九州外国語大学創設の実をかちとられたのであるが、これひとえに先生のねばり強い御努力によるものである。

しかし先生は、後年その当時に想起せられて、次のように述べられている。

「……内にあつては、腐朽した陋屋の修繕や、荒れ果てた校庭の手入れに努力し、出ては、あるいは五市の市庁を訪れ、あるいは有力者の門をたたいて、陳情を重ね、労作と奔走に明け暮れていた光景は今尚髪髭として眼前に浮んでくる。従って、昭和二十五年二月二十日、待ちに待った北九州外国語大学設置の認可がきまって、歡喜の声が全校に漲っていた最中に一抹の

さびしさを感じさせられたのは私一人ではなかったであろう。ただ一筋に、今日あるを祈って、心血を注いで懸命に働いてくれた学生たちのうちで、第一回生はすでに一年前に学窓を巣立ち、第二回生は二週間後に行なわれる卒業式を待って学校を去ってゆくからであった」。

先生はその卒業式に臨んで、去り行く学生に対して先哲の言葉を引用して「報いられる望みなきにもかかわらず、ただ与え、ただ贈り、ただ捧げ、ただ放出する行為ほど世に貴いものはなく、そうした行為によってこそ、一国の文化を発展し、人類の福祉を増進するのだから、諸君は卒業後といえども、在校中学校のために尽した心がけをいつまでも身に着けているように」と心からなる臚の言葉をおくられた。

この学生へのひたむきな愛情、それが先生の全身全霊を学校の発展のために打ち込んでのお姿であったのは申すまでもないことで、ここで引用された先哲の言はまことに印象が深く感に堪えない。

昇格の翌年には、昼間勤務に従事しながら向学心に燃える青年のために夜間の短期大学の付設が実現されたが、さらに市立大学として、地域社会へ対応しての商学部の設置の必要が考慮されて、老学長は再び不退転の努力を傾けて事にあたられることになった。

今回もまた非常なご苦心で、幾多の難関をのり越えて昭和二十八年三月に設置認可を得、これを機会に校名も「北九州大学」と今の学校の校名に改称されることになった。

かくて翌年には、懸案であった構内旧米軍 CIO 施設の接収解除を得て、大学本部移転の実現を見、つづいて昭和三十一年四月八日待望の図書館の新築も完成というふうに、ようやく施設内容も充実し、その年七月一日に大学は創立十周年記念式を挙げて、開学十年の年輪を契機に新たな飛躍を期することになった。これよりさき、すでに学長の椅子を退く決意を表明されていた大島先生は、同窓生、学生、教職員の深い愛惜を謝して、感慨も一人深く翌八月二十八日学長を退職せられたのであった。

当時新聞は大島学長の退任を報じて、一学園を去る「北九州大学の父」、宿題を果たした「大学昇格」、イバラの十年「青い芽」伸ばすーという見出しで、学園経歴書付の十年を報じているが、その一節に、近く学園を去る大島学長の言葉として次のように述べている。

「二十七年ごろ、廃校論の出た時が一番苦しかった。戦後の混乱期に当校建設を思い立った市の幹部はえらかったし、苦しい時代を切抜ける為にいろいろ努力をして下さった市民の皆さんに対しては感謝にたえない。これからは、小倉および北九州の価値を本当にわかってくれる立派な後任者を選んで後を譲りたい」。

春風秋雨十年、思えば長いようであって短い十年、この間学園より巣立った卒業生は千四百四十八名、それが今北九州はもとより、国内国外の各地で各界の中堅として活躍しているが、これはまた学園の慈父たる大島直治先生の育英の延長線にあるもの、まことに心強い限

りでは今はさぬ地下の先生も莞爾としてほほえまれていることであろう。

小倉時代十年は、先生の数え年六十八歳より七十八歳までの期間で、文字通り嬰謀として陣頭に立つ先生が、大学のその「苦難の十年」を「希望の十年」に転ぜしめられた。私達は先生の晩年のお姿を深い感銘を以て仰ぐ次第である。(北九州大学教授)

2. 北九州大学学長を引き継ぎ、大島理念を拡充させた今中次麿学長

次は本学の学長を引き受けられた今中次麿先生に登場を願おう。

今中次麿先生は大島直治学長の意思を引き継がれた。

今中教授の経歴は以下のとおりである。第五高等学校を経て、東京帝国政治学科卒業。東大では政治学の吉野作造にも師事する。1919年、同志社大学講師に就任、のちに法学部長となり、住谷悦治らとともに「同志社アカデミズム」の一翼を担った。1928年九州帝国大学に転任、以後名誉教授授与。1953年広島大学政経学部へ転任。1957年から1963年まで佐賀大学、1965年から1971年まで北九州大学のそれぞれ学長を務めた。

クリスチャンでリベラル学者の立場として第二次世界大戦中、政府を批判し九大を辞職した経緯がある(戦後復職)

今中次麿先生は筆者が在学中の時の学長であった。筆者は学生時代に今中学長とお会いしたことがある。ある新聞社主催の懸賞学生論文に応募したところ、入賞し、今中学長から学長室訪問をゆるされて、懸賞論文について報告したからである。そのときに今中学長との会話を今でも鮮明に覚えている。第1に、今中学長の祖先は広島藩の家老であったこと。第2に、論文の書き方について教わったこと。第3に、今建設中の2棟のビルの外壁にはレンガに似せたタイルを張る予定だ。コンクリート抜き打ちの建物は大学に相応しくない。アカデミックなキャンパスの雰囲気を大切にしたいからだ、と。それは今にして思えば、大島学長の功績を称えてのことであったであろう。今中学長は以下のように述べられている。

創立20周年の祝典にあたって 北九州大学 今中次麿 昭和41年11月11日

現在私ははからずも、北九州大学において大島先生の偉業を継承しているが、強固な意志をもたれる大島先生の性格が強く偲はれる。それなくして学園の出現はあり得なかったと私は思う。幸いに今、北九州五市の合併によって、北九州大学は7政令都市の一つに支えられることとなり、急激な発展をとげつつあるが、20年の過去を顧みて、本大学の歩みが、むしろ奇跡的であったという感もする。この奇跡は決して天佑ではなくして、専ら創立者大島先生の固有

な人間的力によるものと考えている。先生の真率さに抗し得ないもの、先生の強固さに対立し得ないもの、かような人間的な生得力と、更に先生一生の倫理的教養からくる貫徹力の賜物以外の何ものでもないと思うのである。

敗戦後の虚脱から再起する日本の道は、文化的な平和国家でなくてはならないというのが終戦後の一般の思想であり、学校教育に対する世論が高まっていた。当時小倉市の心ある人々の間にも同様の思想があり、ついに今日の北九州大学の前身たる小倉外事専門学校が設立されることとなった。

もともと、小倉市はその周辺に有数の産業の基地をもち、アジア大陸への交通の要路に位置し、全九州の門戸として、産業のみならず交通上重要な地位を占めていたから、早くから総合的な大学があつてしかるべきであつたが、それに恵まれなかつた。

しかも、戦後の産業上の変革は、この地が当然もつべき伝統の発展の上に多くの障害をつくりだし、意図と現実との矛盾は過去における本学の発展の上に少なからざる陰影をなげかけたのである。

それにもかかわらず、この障害を克服して、本学をして今日あらしめた関係者諸氏の苦心と努力とは、感激なくしては、これを回顧することはできない。

このような本学のもつ現実的運命が、多くの熱意と祈願とをさまたげつつも、とにかく四年制総合大学としての基礎を本学は与えられている。それについては、本学を直接・間接に支えてきた北九州五市が統合をして人口百万の北九州市となったことの意義は大きい。

がら、古い大学は校舎の建設や教官の養成ができてのち、はじめて開学されたのであるが、戦後はその余裕がないまま旧兵舎や旧下級教育機関の施設を転用し、20年後の今日においても、なお新設大学の多くは施設の不備に頭を悩ませている。

ただし、私立大学の多くは校債や銀行融資による採算制をとるにいたつたため、立派な施設を有している。国立大学は緊急改築を要する多くの老朽校舎をかかえているが、自然科学方面の拡張のために要する施設費も少なくなく、地方国立大学はいぜんとして老朽校舎に悩み、旧設大学も施設改善をさまたげられている現状である。ところが、公立大学にいたつては、法制的に国の財政補助を求める根拠がなく、もっぱら豊かならざる地方自治体の財政に依存せねばならぬため、戦後発足をした公立大学の多くは、きわめて不備な施設のまま放置され、今日にいたつている。しかし、最近教育が当面するベビーブームによる施設拡張の要求により、文部省は自治省をうながして公立大学の施設改善・拡充をはかつてくれた。そして、校舎新営費の7割程度の地方自治体に対する起債と、きわめて僅少ながら実費に対する3分の1にあたる設備補助を国の予算の中から認めることとなったが、これが公立大学に対する施設・設備改善の端緒となっているにすぎない。

北九州大学に対する北九州市の財政的繰入金は年々増大の傾向にある。これは、大学の本質から当然のことではあるが、北九州市が本学の存在理由を積極的に評価し、精神的・財政的に力をそそいでいることは、まことに心強い次第である。

北九州市マスタープランの基本計画では、北九州市に市立総合大学の必要性を強調し、本学はその核となるべきことを述べている。しかし、政令指定都市とはいえ、北九州市のさきうる大学建設予算には限界がある。本学がもつべき建設計画にも自ら限界が生じる。昭和41年度版のマスタープラン実施計画で、北九州大学のさしあたっての目標を「人文社会科学系複合大学」の完成としたのもそのためである。昭和40年度に商学部に経営学科が新設され、41年度には商学科の学生募集が停止されると同時に経済学科が新設され、さらに国文学科と英文学科からなる文学部が新設された。これは、この拡充・発展の目標への第一歩である。が、これだけでも少なからざる新教官を必要とし、さらに法学系の専攻を今後新設するとすれば、一層の増員が必要となる。

北九州大学の明るい将来を夢みることはできるが、その道は今後も決して坦々たるものではないかもしれない。決意をあらたにして不断の努力を全学あげて誓いたい。

それにしても、今ここに本学にとって喜ばしい20周年の祝典が、新営なった本建築の校舎で行なわれることを祝し、ここにいたる過去の関係者のご苦心に感謝し、将来に対する速かなる内容・外形の完成を祈るものである。

教え子が語る大島学長像

ところで当時の学生は大島学長をどう見ていたのであろうか、3人の学生から意見を聞こう。

3. [大島直治先生と大学10年の風霜] 加藤宗幸さん(当時学生)(名誉教授)

加藤宗幸さんは外事専門学校第1期生であった。加藤さんは他の軍隊復員者の学生とは違って、少数ではあったが旧制中学卒業後、小倉外事専門学校に入学し北九州大学卒業後は大学院に進学された。そして母校の教師となって後輩を教えるという、本当に大島学長の秘蔵っ子であった。それだけに大島学長を学生時代から教師時代を通じて観察してきた人物ともいえよう。大島学長がなぜ突然に本学学長を辞退し、神奈川県に居を移されたのか、大島学長の胸中を照してくれている。

大島倫理学

(第1回入学式大島直治校長訓話)

われわれが大島直治先生に初めてお目にかかったのは、昭和21年9月20日の小倉外事専

門学校の第一回入学式の校長訓辞の時であった。ソクラテス、プラトン、カントなどを引き合いにしての先生の熱のこもった御訓辞は、敗戦後の虚脱の中でひたすら精神的再生のよすがを求めていた若者たちが、恐らく初めて接した格調高いアカデミックなものであったろう。

私には先生が語りかけられたことのすべてが、十分に理解できたとはいえないが、それらは、その日を出発点とする私の学生生活への心の準備をしてくれたものと信じている。

私の成績表によると、先生は毎週一回、われわれに哲学の一部門である倫理学を、「公民」という科目名で講じられたようである。われわれは哲学というものには、多少の程度の差はあったが、それぞれ関心と期待を寄せていて、それを学ぶことに誇りを感じていたが、慈父のごとき温容の先生の、独特の抑揚をもった、訥々として懇切な親しみ深い話しぶりの御講義に、いつしか魅了されていった。われわれは先生の御講義の日が来るのを楽しみにして待ち、御講義に接しては、われわれの思いが古今の幾多の賢人哲士たちに倣って、高大にして深遠なる哲理の究明の旅に誘われているのを知って、青春の日の愉悦と誇りを味わうのだった。

週一回三年間にわたる御講義であったが、欠席する者がきわめて少なかったことは、よくこのことを証明している。授業中に乱暴に書き記したものを帰宅して清書し直すことか、私にとっては何よりの喜びであった。卒業して後は「永久保存物」として大切にしていたそのノートを、幾度も引越して失ってしまっているのが悔やまれてならない。

(大学 10 年の風霜)

しかしながら、われわれが先生の御講義の日が来るのを楽しみにして待っていた頃、先生は多忙を極めておられたのだ。「大学 10 年の風霜の歴史は大島学長 10 年の風霜の歴史にほかならない」と語り継がれているが、そもそも先生が小倉外事専門学校長就任の要請を受けられた 21 年 3 月初めから、「大学 10 年の風霜の歴史」に重なる先生の「10 年の風霜の歴史」は始まっていたのである。

忍耐と誠意、これが先生の真骨頂であったと思う、誠心誠意は先生の御人格であろう。先生の好んで書かれた書に「誠者天之道也誠之者人之道也」というのがある。先生はこの中庸の句を實踐して居られたお方であると思う。

先生のライフワーク 「わたしの魂のふるさと」

先生は明治 12 年 (1879) に奄美大島にお生まれになり、38 年 (1905) に東京帝国大学文学部哲学科を卒業され、42 年 (1909) に第七高等学校造士館に教授として赴任された。大正 13 年 (1924) には九州帝国大学に教授として転任された。先生は明治 31 年 (1898) に東大に入学され、昭和 14 年 (1939) に九大を退任されるまでの 40 余年間、古今東西の書をひもときながらの研究と教育に携わり、自らの哲学・倫理学体系を築き上げられた。

先生は、60歳での九大御退任の何年も前から、ライフワークのことを考えておられ、御退任後にじっくりと完成させたいと思っておられたであろう。しかしながら、戦争は次第に激しさを加えていた。そして食糧不足、生活難も一層厳しくなりつつあった。先生は身をもってさつま芋づくりやかぼちゃづくりなどの労働に従事し、困難に対処しなければならなかった。必然的に先生の書齋での静かなお仕事は妨げられたであろう。

20年6月には米軍機の空襲によって万冊余の御愛蔵の貴重な書物を、住み慣れたお宅もろとも灰燼に帰されてしまった。先生の御研究は致命的な打撃を蒙った。

20年8月、戦争は終わった。先生はお宅の再建と先生自らの労働による食料補給（26年の小倉御移転の頃まで続く）に心を砕かれねばならなかった。21年の3月初めに先生は、小倉外事専門学校校長就任の懇請を受けてこれを受諾され、北九州大学10年の風霜の中に参入されて、さらに10年、著述のライフワークから引き離されることになった。

31年（1956）8月に77歳で北九州大学を退任される前後から、ようやく先生の念頭に著述のライフワーク完成のことが去来するようになった。藤沢市鶴沼のお住まいに落ち着かれたが、やがて奥様が病床に就かれることになり、先生は御看病にあたられた。そして、34年8月には、先生は生涯の最大最愛の盟友であり、半世紀にわたる御伴侶であった奥様と永別されたのである。

40年の暮れ頃から先生は風邪にかかれ微熱が引かなかった。御家族の方々は先生が老人性肺炎ではないかと案じて、先生を東大病院へ入院させられた。先生が退院されたのは41年2月18日であった。5週間の病院生活から解放された先生のお喜びと御希望は格別のもので、先生が「鶴沼やあと15年まるもうけ」、「長くも白寿をこえて働けと声ぞ聞ゆる目には見えねど」と詠まれたのはその折であったろうか。先生は口癖のように、「はくは百まで生きるのだ」、「百まで生きて本を書かねばならない」、「百まで生きてライフワークを完成させるのだ」と、会う人ごとに漏らされていたようだ。退院された先生は、未完の著述のライフワークを完成させるという希望があり、それを叶えるという仕事が待っていたのだ。

しかしながら、先生が白寿を超えるお年まで生きられての著述のライフワーク完成の実現は、ついに永遠の挫折に終わってしまった。お体の衰弱が進み、先生は床にお就きになることが多くはなったが、先生の88歳のお誕生日である42年5月2日には、御自宅での七高、九大、北九大の代表の方々による、大島先生米寿記念の祝賀会に参席され、祝賀文集『知と愛』の贈呈を受けられた。先生はその後、さらに衰弱を加えられ、6月5日静かに88年の御生涯を閉じられたのであった。

先生の「壮図」実現の大挫折は真に痛惜の極みである。しかしながら、学者としての先生には、かくしてほとんど著書の形での業績と呼べるものがなかったということは、厳然とした事

実であった。

私は専門学校の一回生であり、大学の一回生でもあり、卒業後は、大学「創設の親たち」である恩師や職員の方々の中で勤務するようになったので、大学が生まれ育ってゆく、さながら針の山を登るが如き状況を、直接間接につぶさに知ることを得た。

41 年 5 月、大学 20 周年記念史編集のことで、大島先生の鶴沼のお宅を訪問する機会を得たが、先生は往時を回想されて、御自身の学問への時間が大きな犠牲を強いられ、不本意な日常的事柄に忙殺されていたと、われわれには一面考えられたのであるが、われわれの大学を一日も早く、名実共に北九州の大学として、盤石のものたらしめるべく、日夜奮闘されていた日々のことを次のように申されていた。

西郷隆盛のごとく名も金も何もいらぬ。勉強も何もかも忘れて、ただ北九州大学のために、あたかも北九州大学に魂がとりつかれたごとく、全身全霊を捧げずにはおられなかった。七高、九大、北九大のうち最も心に沁みたものは北九大であろう。

先生にとっては日々刻々が真剣勝負であり、そして敗北は許されなかった。先生が「勉強も何もかも忘れて、ただ北九州大学のために、あたかも北九州大学に魂がとりつかれたごとく、全身全霊を捧げずにはおられなかった」所以である。

大島先生は、第二次世界大戦後の日本の青年教育の振興に参加することによって、新日本を建設し、世界の平和と人類の福祉に寄与する若者たちを育成するという高い理想に基づく目的を抱かれて、小倉外事専門学校の校長就任の要請を受諾された。即ち、新日本を建設し、世界の平和と人類の福祉に寄与する若者たちを育成する場を創設し、そこにおいて若者たちを育成するという目的の実現を、道徳の命令または当為として果たすことを意味していた。先生は先生のいわゆる「道徳の命令または当為（ゾルレン）と意欲（ヴォルレン）との一致する境地」を貫かれることになったのである。

かくして先生は、ひたすら己を空しうして、席の温まる暇もあらせず東奔西走、全情熱を傾けて、絶望的であると見られていた専門学校からの大学昇格を見事に実現させ、母体市・小倉市の財政難による大学の経営難が招いた大学の、北九州五市共立の不成功に堪え、国立、県立、私立への移管論、そして深刻な廃校論などを退けて、学部拡張までも成し遂げられた。

先生はまず安心して学生の教育が行える場、北九州大学の創業を成功させ、その基盤を確固不動のものにすることに尽瘁された。そして先生は 31 年 8 月 28 日、愛する大学が総合大学としての偉容を呈しながら、学運隆々として日に月に発展の一途を辿りつつある姿を見届けて退任されたのである。

先生には著書の形でのライフワークはたしかになかった。そのライフワークとは、「実践は真理検証の唯一の手段」という言葉があるが、先生が生涯をかけての学問体系の真理を検証す

る「唯一の手段」としての実践を通して、艱難辛苦を重ねられた結果、創造された北九州大学であり、そこで学ぶ学生たちであった。

そして、その先生が「名も金も何もいらぬ。勉強も何もかも忘れて、ただ北九州大学のために、あたかも北九州大学に魂がとりつかれたごとく、全身全霊を捧げずにはおられなかった」と語っておられる言葉の中の北九州大学は、未来永劫、生成発展して止むことのない生きた存在ともいべき大学であり、そして学生は、いと高き先生の理想を建学精神とするその大学で、学んだ、学びつつある、そして学ぶであろう、大学と同じように未来永劫、生成発展して止むことのない生きた存在としての学生であった。

われわれの鑽仰おくあたわざる先生の偉大なるライフワークとは、まさに先生が全身全霊を捧げて創造され、「私の魂のふるさと」と称されているわれわれの北九州大学と、そこに集い学んだ、学びつつある、学ぶであろうわれわれ学生であったのだ。

4. 「大島学長寿像建設を顧みて」守谷隆三郎さん（当時学生）

大島直治先生の突然のご退任に衝撃を覚えた在校生がとった行動は、大島先生の座像の作成であった。

これに携わった学生会の代表が守谷隆三郎さんであった。彼が座像設立について以下のように記している。

昭和二十二年四月、小倉外事専門学校は天神島小学校の仮校舎より、北方の現校地に移転を完了した。ある人は「狸でも住みそうな草原の中の旧兵舎であった」という。

朽ち果てた屋根からは、雨もり、運動場には荒れはてた兵舎、倉庫などがあり、空地は瓦れきと泥土に埋っていた。まさに荒廃した学園であった。大島直治先生が、着任されたころの大学の姿はまさにこれであった。

そのときから星霜二十年、先生の建学精神を礎石として、大学は飛躍的に発展をなし、いまや高度の学術研究・教育機関としての使命はもとより、北九州市民の文化活動ならびに創造活動の中核として着実な歩みを進めている。

昭和三十一年八月、われらがひとしく慈父と仰ぐ大島先生の突如としてのご退任は、ご高齢とはいえ、われら同窓生を驚愕させた。十年の慈父、否生涯の学問の父である先生のご退任は、われらの悲痛はこの上もなかった。本学十年の風霜の歴史は、また先生の歴史にほかならず、温容、慈父の銀髪、額にきざみ込まれたシワの一筋一筋は、北九州大学のためにつくされた辛勞の跡であった。

ご退任後、先生は神奈川県藤沢市鶴沼に居を移され、余生を学業の研究に専心されたので

あります。惜別去り難いわれら同窓生は、先生の偉業を大学にとどめんとして、寿像建設の志が強くうちだされた。

その年の十月、三十七名の同窓が集い、寿像建設発起人となり、土谷同窓会長（現同窓会相談役）をかなめとし、建設資金の募金にのりだしたのである。先生の偉徳を直接に偲ばれるということで、寿像の建設資金は、広く一人でも多くの同窓生の浄財を集めるという方針が議せられ決定した。

地元北九州を始めとして、東は北海道、東京、関西、西は、佐賀、宮崎などの二十を超える支部（会員数四千名）に一斉に激がとばされた。

何回かの発起人会議がもたれ、募金の方法募金額、募金終了の時期、建設の時期などが議せられ、決せられたことについては、発起人たちは、精力的に行動し、帰宅も夜になることが多かったように思う。

翌三十二年四月、同窓生の寿像建設に対する情熱と行動は遂にかなえられ、建設に必要な資金の調達はここに完了したのである。

翌月、発起人世話役の土谷、反田、西野、海原、梅田、徳田、稲泉、守谷の手によって寿像建設の具体的な実施要領などが進められた。まず寿像の原型を製作するために先生のお顔の正面、左右側面の写真が必要とされ、早速、先生にお願いしたところ、快諾をいただいた。日頃先生は、報道記者などにも写真を撮られることはお嫌いであったようですが、そのときだけは非常にご機嫌が良かった。シャッターをきるときに、温厚なるお顔に一瞬先生の緊張された表情は、われわれの脳裏にいつも新しくのこっております。

さて、その写真を原図として田川郡の小森紫虹氏が、原形の制作にとりかかり、石膏で原型を作り、いよいよ鑄造にとりかかる段階にまでこぎつけ、寿像は完成へと一歩一歩近づいて行ったのである。

つぎに台石の表面にとりつける銅板の題字は、当時の学長であられた古野清人先生が自ら喜んで揮毫くださいされ、題字も「大島学長像」とされた。また碑文については、大学創立の功績者である末岡作太郎教授(故人)が考証を担当され、国文学教授の亀谷敬三先生により撰文された。堅実な学風と高邁な建学精神の確立は一に先生の卓越した識見の発露である。

同窓の諸氏乃ち相会して先生の高徳と偉業を永久に記念するため胸像を校庭に建設することを議り浄財を醸出して工を起す今や工を竣え像成る「温厚慈父の如き先生の高風は追憶と共に新である」は碑文の一文段である。

10月に施工責任者である井筒屋より、寿像建設工事竣工の通知に接した。寿像は大学校門横の敷地に完成したのである。11月7日、待望の除幕式が大島先生、ご令息をはじめ・県市関係、大学、文化関係者多数が列席のもと、八坂神社高山宮司の先導により厳粛なうちにも華々

しく挙行された。先生の愛孫さんの手によって除幕が奏楽のうちになされ、参列者よりの大拍手は、蒼天の秋空に高く響きわたった。

北九州大学の校門に近く先生の胸像が二千の学生をはじめ、教職員、また同窓生一同に無言の訓えと限りなき慈愛とを大学の成長とともに永久に賜わるかと思えば、今日の佳き日の同窓生一同の心境はまさに感無量の極に達していたといえる。

今は逝き先生を偲ぶとき、温容慈父、それはわれらが初代学長大島直治先生のためにある言葉である。

先生を仰慕する七千の同窓は、ありし日のご尊顔を偲びつつ、先生の高徳と偉績を永久に追憶することでしょう。寿像建設時の一端を録して先生の霊に捧げる次第であります。(北九州大学同窓会相談役)

付

大島学長寿像建設概要

一、施工責任者 株式会社井筒屋

二、総高さ 九尺八寸

三、寿像胸像(実物大)

原型製作者田川郡添田町 小森紫虹

鑄造者富山県高岡市 大寺幸八郎

台石工事者田川郡添田町 田川勇吉

四、題字北九州大学長 古野清人

五、碑文選者 考証 末岡作太郎

撰文 亀谷敬三

六、胸像建設発起人

土谷清ほか三十六名。

最後に、当時の学生は新たに作られた大島校長像をどのように見ていたのであろうか。

軍隊上がりの三宅英利青年が率直に語ってくれている。なお三宅さんは本学を卒業した後は、高校の教師になられた。高校教師時代、熱血教師として生徒から慕われ、評判であった。それが縁で請われて本学の教員になられたのである。稀有な先輩であったといえよう。

5. 「青葉の胸像」三宅英利さん（軍隊復員学生、名誉教授）

その日は夏の名残りをこめて、灼熱に光る積乱雲が足立山の裏から湧きに湧いていた。終戦のあくる年の九月二十日である。ゴミゴミした市場の外れにある汚い小学校の講堂では、三百名たらずの青年たちが異常な感動に身を震わせていた。

中学からストレートにきた僅かの者をのぞいて彼らの多くは軍隊からの復員者であり、まだ眉に涼しさの残る陸士、海兵、予科練もいれば、艦隊参謀やニューギニアで守備隊長であった人もいた。

そして私も講壇に向かって左から二列目のなかほどで彼らと同じ感動にひたっていた。私もそれまでの数年を軍隊で送り、その退廃と無為の日々によって、まだ青春時代というのに早くも人生への可能性を失おうとしていた。

終戦は私なりに、みずからへの覚醒をよびおこしはしたが、みずから考え、みずから選ぶには思考の根源を失っていた。それでも終戦から半年のちに、南九州のある学校に入ったが、意に満たない講義にすぐ飽いて、そこを在学のまま、むしろひやかし半分に小倉外事専門学校の入学式に出たものであった。

どちらにするかは入学式の後に決める考えであった。家だけは焼け残っていたが、着るものもなく、食物もない終戦後の貧困と混乱にあって、しかも数年の荒廃し、精神生活からはみずからの未来に対する論理の設計がなれるはずもなく、やたらにこれも焼け残った書架から『愛と認識との出発』や『善の研究』などを引き出しては、ただ字面を眺めているにすぎなかった。ひどく知識に飢え、乾いた心はともすれば無気力と絶望に変わろうとしていた。それだけに生命につながる高い知識と哲理が必要とされた。みずからも説明のつかない疑問や懊悩や焦慮、それらに対して、どうでもいいともかく統一が欲しかった。それゆえ入学式の話などは"どうせ校長のなが話"というひやかかな心で講壇にのぼってゆく白髪の老人を眺めたものであった。

私が話の中に激しく吸収され、それが次第に大きな感動と変わって私自身に返ってくるにはたいして時間がかからなかったと思う。厳しく選ばれた深い言葉で文化の本質が述べられ"人間の尊厳と内なるものへの認識が、自己の存在を支えるすべてである"ことが語られ、プラトンの純粹なる認識によって把握される根源 ..to Platon. の追求と、それへの人間的要求である哲学的精神 eros、が説かれた。

それは厳粛とも温諄とも、清冽とも壯麗ともいいようのないものであった。それはまさに広漠たる乾田に沛然と降りそそぐ大雨であり、漆黒の海上を走る、まばゆいばかりの光芒であった。私は学問というもの、真理の实在というものはじめて感じた。これが先生と私における、

よく先生のいわれた"機縁"であった。

それから卒業までの数年、私は在学期のほとんどを学級委員、ときに総務もしたので、先生とお話する機会もずいぶんあった。学校の敷地を城内か、北方かに決定するため、現在の場所を訪ねたとき、荒れはてた兵舎の残る葬々たる草叢に立って、「便利は悪くてもここが広くて良い。この学校はきっと大きくなる」とはっきりいわれたお言葉や、講義のなかで時折、「孔子さんがー」、「孟子さんがー」というお話方など印象的な思い出も多い。三年にもなると、鐘に合わせて次々に知識をつめ込む日々は却って人の思想を浅くするものではないか、という無意味な反抗をしてはよく講義をサボったが、私の時間割では先生の倫理学は必修であった。

母校を出てから約二十年、漂泊を終えて再び先生にお逢いしたのは一昨年であった。先生は菊の花に飾られ、遺影となって大学講堂の壇上にあった。大学葬の日であった。

入学式の講話をはじめ、多くの追憶にぬくぬくとしていた私は、ふいにテープを通してなつかしい先生のお声が流れだした途端、こみあげてくる涙を抑え得なかった。しばらくして気づくと、同窓の誰彼があちこちで泣いていた。それを見ているうちに、ふと同級生の商学部教授大塚勝美氏から承ったお話を思い出した。亡くなられる二、三日前に訪ねられた同氏が別を告げて病室から出ようとふと振り返ったとき、先生は床の中から同氏へ向かって合掌された、というお話であった。それは今にして思えば愛弟子であった同氏を含めて私達みんなへの別れであったに違いなかった。私は、また新たな涙を感じた。

北九州大学の門を入と、すぐ右手に、深い青葉の陰を浴びて先生の胸像がある。学ぶ楽しさも知らず、決して優秀でも模範学生でもなかった私はその胸像の前を通るたび、あの入学式の日"内なるものへの認識"をきっと思い出しては胸をつかれる。そして先生のいわれた"因果の流れ乗せられて乗る"という現実のさなかにあって、ともすれば陥りがちの倦怠を意識して首をすくめる。だから今でも、その胸像の前では会釈なしに通りすぎることができないのである。(北九州大学助教授)

結びに代えて — 『国際論集創刊号巻』 巻頭言を振り返る —

拙稿を国際教育交流センターが発行している『国際論集』に掲載したいと思ったきっかけは2点ある。

第1には北九州市立大学の正門に座されている大島直治校長寿像を皆に知っていただきたかったからである。福沢諭吉氏や新島襄氏に匹敵する大島先生を知る学生は少ない。本学の歴史に興味を持つ学生も多くない。

「世界の学び方」を講義する中でこのことを再認識した筆者は学生が興味を持つように「苦

節 10 年、小倉外事専門学校設立に情熱を傾けた初代校長の大島校長—大学正門に座している胸像はだれ?—と題して当時の教職員や学生たちが小倉外事専門学校開学に向けた大島校長の情熱をどのよう受け取っていたのか、彼らの言動を中心に資料を整理し、それを提供したいと思ったのである。

当時、校舎は陸軍工兵隊の荒れはてた建物で、占領軍が構内に隣接して駐留していたような状況であった。それに入学式の翌 6 月には朝鮮戦争が勃発し、北方、城野は基地の姿に一変した。

このような異常な環境の下に大島学長の説く祖国復興、平和希求の建学の精神に基づき学生諸君が愈々志をかたくもち、我々として切磋琢磨した当時の姿は忘れられない。

「わが国こそは常に新しく、したがって永遠に若き国であるといえるであろう。これを文化的に視るならば、不断に東西の文化を創造し、かくして世界の文化に貢献しつつ、きわまりなく民族的個性を展開させていくことに寄与するところ、本学の歴史的使命がある」と小林安司元教授。

今中学長は「20 年の過去を顧みて、本大学の歩みが、むしろ奇跡的であったという感もする。この奇跡は決して天佑ではなくして、専ら創立者大島先生の固有な人間的力によるものと考えている。先生の真率さに抗し得ないもの、先生の強固さに対立し得ないもの、かような人間的な生得力と、更に先生一生の倫理的教養からくる貫徹力の賜物以外の何ものでもないと思うのである」と述べておられる。

教え子の加藤さんは、ライフワークとは「実践は真理検証の唯一の手段」という言葉があるが、先生が生涯をかけての学問体系の真理を検証する「唯一の手段」としての実践を通して、艱難辛苦を重ねられた結果、創造された北九州大学であり、そこで学ぶ学生たちであったと締めくくっておられる。

守谷隆三郎さん(当時学生)は当時の学生の気持ちを表している。大島学長の突然の退任は、学生の精神的支柱を喪失させた。そのため大島学長の座像を崇めることによって精神的安定化を求めようとしたのである。すなわち、先生を仰慕する同窓は、ありし日のご尊顔を偲びつつ、先生の高徳と偉績を永久に追憶しようとしたのであろう。

その証拠に、三宅英利さんは、「今でも、その胸像の前では会釈なしに通りすぎることができないのである」と告白しておられる。

このように、平和を大切にす大島直治学長の開学の理念は 75 年経った現在でも決して古くはない、むしろ最先端を走っていると言えよう。

第 2 の理由は紙媒体としての『国際論集』がこの第 20 号をもって終了することである。創刊号を発刊した責任者の 1 人として筆者にはある感慨がある。この種の学術雑誌は第 3 号も発行できれば大成功だ、と言われている。それが第 20 号まで続いたことは驚きである。

ここまで育てていただいた皆様に感謝の意を表したい。そのために拙稿を上奏した次第である。

ところで「新しい酒は新しい革袋に盛れ」という諺がある。時代の流れに目配りをして絶えず進歩発展が必要である。私は声を大にして言いたい。来年度からの電子媒体の『国際論集』に前途あれ！と。

最後に 20 年前の『国際論集』創刊号の巻頭言を紹介して結びとしたい。

『国際教育交流センター紀要』創刊の喜び

北九州市立大学国際教育交流センター所長 山崎勇治

今年は私たちにとって記念すべき年である。念願であった「国際教育交流センター紀要」をようやく出版する運びとなったからだ。

2001 年 4 月に旧日本語教育センターと旧国際交流委員会とが発展的に解消して「国際教育交流センター」が産声を上げた。専任教員 2 名、兼任教員 25 名、非常勤講師 6 名、それに正規の事務職員 1 名に臨時職員 2 名の構成要員からなっている。1 つの学部として位置づけられたのである。

私たちは、新しいセンターとなってセンター内の 3 つの部門において次つぎと新基軸を打ち出していった。日本語教育部門ではさまざまな日本語レベルの留学生を受け入れるだけのカリキュラムを揃えつつある。その結果、沢山の留学生のみならず交換留学生を受け入れている。また昨年の夏には台湾の中華大学の学生 20 名が本センターで 3 週間の日本語学習プログラムを終えて帰国した。日本人学生のための日本語教師養成講座や、市内に住む外国人のための日本語入門講座も好評である。

外国語教育部門では、留学生支講座を夜間に開設した。いわゆるダブルスクールである。本学の学生に、留学先の大学で単位を取って帰れるだけの英語能力をつけさせることを目的としている。トイフルのスコアが 100 点も伸びた学生が続出している。学生の間で好評なので、将来的には中国語や韓国語の講座も開設したい。

交流部門では、国際教育交流センターが学部扱いとなったお陰で、各学部の意向に左右されずに姉妹大学との締結のスピードが速くなった。オーストラリアのクイーンズランド大学、タスマニア大学やアメリカのカリフォルニア大学デービス校、中国社会科学院人口研究所、それに台湾の中華大学と姉妹協定を締結した。

センター全体の事業として 2002 年ワールドカップ日韓共催に因んで、NHK 北九州放送局と

苦節 10 年小倉外事専門学校設立に情熱を傾けた初代校長の大島直治氏

共催で「日韓交流イベント トークライブ 感電ハンゲル」を開催した。(2002 年 6 月 1 日)

カーディフ大学との交流 10 周年を記念してカーディフ大学副学長、WDA (ウエールズ開発庁) 東京事務所長などを招待して「日英国際シンポジウム」を本館 A 101 教室で開催した。500 名を上回る参加者からも評判が良かった。(2002 年 10 月 24 日)

センターの兼任所員による秋季公開講座「世界の大学巡り」も好評であった。

韓国の仁川大学校、大連外国語学院の専門の先生をお呼びして「言語・文化国際シンポジウム」を開いた。(2003 年 2 月 22 日)

これからは、これらのセンター所員の研究や教育の成果を「センター紀要」から学外に向けて情報発進できる。この喜びは他にたとえようがない。

引用文献と参考文献

大島直治先生米寿祝賀文集「知と愛」昭和 42 年 5 月 2 日発行

『大島直治先生追想録』昭和 45 年 3 月 20 日発行

『北九州大学 20 年その歩みと将来』昭和 41 年 11 月 11 日発行

『北九州大学 15 年の歩み』昭和 36 年 11 月 1 日発行

『北九州大学同窓会 25 年史』昭和 52 年 3 月 19 日発行

『北九州大学 50 年史』平成 10 年 3 月 30 日発行